

異世界でカフェを開店しました。

12

登場人物
紹介

ヘクター

カフェの調理担当。
本来は王宮の
料理人だが、
今はカフェで修業中。

好きな食べ物：
ミートソースパヴェティ

キース

料理科の講師。
孤児院出身で、
かつては王宮の
副料理長をしていた。

好きな食べ物：から揚げ

ジーク

カフェ・おむすびの
副店長。妻である
リサを公私ともに
支えている。

好きな食べ物：プリン

ルトヴィアス

リサの教え子。幼い頃に
料理の道を志し、この秋から
憧れのカフェ・おむすびで
働き始めたけれど――？

好きな食べ物：
ショートケーキ

シャーナ

ルトヴィアスの精霊で、
バジルとは友達。

好きな食べ物：ドーナツ

バジル

リサの精霊で、
食えることが大好き。

好きな食べ物：卵焼き

メリル

リサの専属メイド。
仕事ぶりは真面目だけど、
実は人一倍食いしん坊な
性格。

好きな食べ物：パウンドケーキ

謎の青年

異世界では珍しい
黒髪の青年。街で行き倒れて
いたところをルトヴィアスに
救われる。

好きな食べ物：ポテトサラダ

リサ(黒川理沙)

カフェ・おむすびの店長。
学院の料理科で講師も務め、
異世界に地球の食文化を
広めている。

好きな食べ物：和食

目次

異世界でカフェを開店しました。	12	7
あるメイドの近況	239	
ある精霊の一助	271	

異世界でカフェを開店しました。
12

プロローグ

朝の慌ただしい時間が過ぎ、もうすぐお昼という頃。王都の正門に程近い駅馬車の駅から一人の青年が乗車した。

薄汚れた服にボサボサの髪。旅をしているのかと思えば、荷物はほんの小さな鞆だけ。

その上、意識がどこかへ行ってしまうような、ぼーとした顔をしている。

少し不審な彼から、車内にいる乗客はさりげなく距離を取った。

フェリフォミア王国の駅馬車は前払い制。行き先に合わせて代金を払う。

車掌が青年に目的地を聞くと、とある国の大使館に行きたいという。こんな怪しい人物が大使館になんの用だ!? と車掌は内心で驚くものの、駅の名前と金額を伝えた。

青年はそれに頷いて、鞆の中からお金を取り出す。

どうやらお金はちゃんと持っていたらしい。

ひとまず代金をもらえたことに、車掌はホッと胸を撫で下ろす。

青年のあとから乗り込んでくる客はおらず、出発の時間になった。車掌は運転用の魔術具を操作

し、馬車を発車させる。

馬車と呼ばれているが、魔術式の馬車なので、馬が牽いているわけではない。

駅馬車は趣のある石畳の街を進んでいく。

いくつかの駅を過ぎ、王都の中心部へとさしかかる。老舗や高級店が立ち並ぶ中央通りで、一人の乗客が降りていった。

ここで降りるのは一人だけのはずだと、車掌は次の駅へ向かうべく馬車を動かそうとする。

だが、その時――

例の青年が馬車から降りてしまった。

「おい、あなたの降りる駅はここじゃ……」

車掌が呼び止めるも、青年はあつという間にいなくなる。

大使館はここから二駅先。歩いて行けない距離ではないが……

車掌は唖然としつつも、客一人に気を取られてばかりもいられない。一度止めた手をまた動かし、馬車を発車させた。

一方、青年はといえば、見慣れない景色の中に立ちすくんでいた。

「ここ、どこ？」

あたりを見回すと、大通りにたくさんのお店が並んでいる。煌びやかな王都の中心街だ。

でも彼の行きたかった場所はここではない。

ぐうぐう……

「ふあああああ」

彼のお腹から音が鳴り、口からは大きなあくびが出る。空腹感と眠気に襲われながら、彼はふらふらと歩き出す。

少し歩いたところで緑の匂いがした。そちらへ行ってみると、小さな広場がある。その周囲を囲むように低木が植えられ、内側には綺麗な花壇があった。

青年はおぼつかない足取りで歩いていく。

そして、花壇と低木の間倒れ込んだ。

それから、ものの三秒。

青年は安らかな寝息を立て始める。食欲より睡眠欲が勝つたらしい。

低木の茂みに埋もれるようにして彼は眠る。

広場の上には、初秋しゅうしゅうの晴れ渡った青空が広がっていた。

第一章 過保護じゃないでしょうか？

それは夏の終わりのある日のこと。

どこか慌ただしい感じがする朝の王都を、その馬車は比較的ゆったりと走っていた。

やがて馬車が停まったのは、道具街の一角にある小さなお店の前。

初老の御者ごしやが馬車のドアを開けると、銀色の髪の男性が降りてきた。彼は、同乗してきた女性に向かって手を差し出す。

「ほら」

「えっ！」

黒髪の女性は戸惑うが、男性は彼女の体を軽々と持ち上げた。女性が驚いて目を見開いている間に、両足が石畳の地面に着地する。

「そんなに心配しなくても、一人で降りられるつてば」

「万が一、足を踏み外したりしたら危ないだろう」

彼は涼しい顔でしれつと言った。

「初めて乗ったわけじゃないのに大げさな……」

どこか不満げな顔で呟く女性は、リサ・クロカワ・クロード。今馬車が停まっているお店——カフェ・おむすびのオーナー兼店長である。

そして、未だにリサの腰を支えるようにして立つ銀髪の男性は、ジーク・ブラウン・クロード。彼はリサの夫であり、カフェ・おむすびの副店長なのだ。

そこで、リサの肩から小さな影が飛び出した。

「ジークさん、大丈夫ですよ！ 何かあればバジルがマスターをお助けしますから！」

緑色の服を着た、体長二十センチほどの存在。それはリサと契約しているバジルという名の精霊だ。

バジルは緑を司る精霊で、植物を操ったり、風を起こしたりする力がある。そのため、リサがピンチの時は、その力でたびたび助けられていた。

ただ、バジルの姿を見たり声を聞いたりすることは、残念ながらジークにはできない。

リサは苦笑しつつ、バジルの言葉をジークに伝える。

「バジルちゃんが、何かあれば私を助けてくれるって」

「そうか。俺がない時はよろしく頼むよ」

暗に自分がいる時は大丈夫だと言うジークに、リサはやれやれと肩をすくめた。

先日、リサが妊娠していることがわかってから、ジークは常にこの調子なのだ。

心配してくれるのは嬉しいけれど、今からこんなに過保護になっただけは先が思いやられるなあ、

とリサは思っていた。

馬車がクロード家に戻っていくのを見送り、リサとジーク、そしてバジルはカフェ・おむすびの店内に入る。

一晩閉め切った状態だった店内には熱がこもっているので、リサたちは窓を開け、冷房の魔術具を起動させる。

そうしているうちに、他の従業員たちも次々と出勤してきた。

「おはようございます！」

一番にやってきたのは大柄な青年だ。少し垂れ目で、ホットケーキのような髪色の彼は、ヘクター・アディントン。カフェではリサやジークと同じく調理を担当している。

ヘクターのすぐあとから、二人の女性もやってきた。

「おはよう、今日も暑くなりそうね」

首すじに白いハンカチを当てながら言うのは、ミルクティー色の長い髪を持つ女性。彼女は、オリヴィア・シャーレイン。主に接客を担当している。まだ若々しいオリヴィアだが、こう見えて九歳の息子がいるシングルマザーだ。

「夏も終わりだっというのに、まだ暑さは続きそうよね」

そう嘆く焦げ茶色の髪の女性は、デリア・オーウェン。彼女も接客を担当していて、同じく九歳の娘がいる。

オリヴィアの息子とデリアの娘は同じ年で仲がいい。その縁から、デリアはカフェで働くことになったのだ。

全員揃ったところでカフェの開店準備が始まった。

調理担当は厨房でランチタイムの準備。接客担当はホールでお客さんを迎える準備に入る。

「俺とヘクターでやるから、リサは座っててくれ」

「えー！ さっきも言ったけど、そんなに心配しなくて大丈夫だってばー」

厨房に入るなりジークに止められ、リサは不満を露わにする。

「リサさん、体調悪いんですか？」

二人のやりとりを不思議に思ったのか、ヘクターが質問した。

「全然！ 病気になるわけじゃないし」

「だけどな……」

「無理そうだったら言うから、ね？」

リサがなだめるように言うと、ジークは渋々ながら頷いた。

それを見ていたヘクターはようやく理由を察したのか、「あーなるほど」と作業に戻っていく。

やれやれとため息を吐いたりリサは、なおも心配そうに見つめてくるジークの視線を感じながら、自身も作業を進めるのだった。

開店準備が一通り終わると、カフェのメンバーは二階のスタッフルームに集まり、賄いを食べながら打ち合わせに入る。

今日の賄いは夏野菜のラタトゥイユだ。副菜は、ミズウリというきゅうりに似た野菜と、マローというトマトに似た野菜のマリネ。いつもパンを仕入れているチエステーパーンの丸パンが添えられていた。

それを食べながら、ジークが今日のランチメニューの内容を説明する。接客担当のオリヴィアとデリアがいくつか質問をしつつ、ミーティングは進む。

夏も終わりだというのに、外はまだまだ暑い。お店に来る人たちはその中を歩いてくるので、料理も冷たくてさっぱりしたものを好むだろう。

そういったことを事前に打ち合わせし、臨機応変に対応していくということが、カフェ・おむすびでは日常的に行われていた。

打ち合わせが終わわり、賄いもほぼ食べ終えたところで、リサが「少しいいかな」と別の話題を切り出す。

「来月からメンバーが増えるじゃない？ だから、その前に歓迎会的なことをしようかなと思ってるんだよね。今年は夏の慰安旅行もできなかったし、その代わりに何かできたらって思ってたさ」

「いいと思うわ！ といつても、新しいメンバーは私たちもよく知ってる子だけだね」

リサに賛同しながらも、オリヴィアはふふつと笑う。

「あー、俺はあまり話したことないですよね」

「いつも厨房にいるヘクターくんは、なかなか会う機会がなかったかもしれないわね」
ヘクターの言葉を受け、デリアが言った。

この秋からカフェ・おむすびの新たな従業員になるルトヴィアス・アシユリー・マティアス。彼は、三年前にフェリフォミア国立総合魔術学院に新設された料理科の一期生だ。

この夏、晴れて料理科を卒業し、カフェ・おむすびの調理担当として働くことが決まっていた。料理科で教鞭を執るリサとジークにとつて、ルトヴィアスは教え子になる。そもそも、料理科に入学する前からカフェ・おむすびの常連だった彼とは、接客担当のオリヴィアやデリアも顔なじみであった。

一方、厨房に多くの多いヘクターは、ルトヴィアスと接する機会がほとんどない。

しかし、今後ルトヴィアスが新たに料理人として入るとなると、一番関わるのは必然的にヘクターになる。

実はヘクターの本来の職場は、王宮の厨房だ。料理科の卒業生がカフェに入ってくるまでの二年間という契約で働いていたのだが、このたびリサが妊娠したため、契約を二年延長した。

早く元の職場に戻りたいのではと思いつつ、契約の延長を打診したリサだったが、ヘクターはそんなりと受け入れてくれた。むしろ契約を延長できたことを、かなり喜んでいようだ。

リサとしては、拒否されなくてホッとしたし、カフェに愛着を持ってくれたのであれば嬉しい。

リサもなるべくルトヴィアスを指導しようとは思っているが、出産に向けて仕事を少しずつセーブしなければならぬし、ジークも料理科があるのでつきつきりではない。

これから先、カフェ・おむすびの厨房をヘクターとルトヴィアスの二人だけで回していかなければならない時もあるだろう。

だからこそ、ルトヴィアスがカフェに入る前に顔合わせをしておいた方がいいとリサは思っていた。

「二号店のメンバーと会う機会もそうそうないだろう？ だから、全員揃って何か面白いことができたかと考えているんだ」

ジークが補足するように言うと、オリヴィアが「そうね」と嬉しそうに頷いた。

同じ王都内にあるカフェ・おむすび二号店。その店長のアランと副店長のヘレナも、元はこの店にいたメンバーだ。

特に古株のオリヴィアは、かつて彼らと一緒に働いていたため、久しぶりに会いたいと思ってしまうようだった。

カフェ・おむすび本店と二号店は、あえて休業日をずらしているので、お休みの日に会うということがなかなかできない。

オリヴィアはたまに息子を連れて二号店に行くらしいが、向こうは仕事だし、本店が休みだと二号店にお客さんが集中する。混んでいる時に話しかけるのは、さすがにためらわれるのだろう。

そうした事情もあって、今回の歓迎会はメンバー同士の交流会も兼ねて行おうと、リサとジークは考えていた。

「王都の外に出てちよつと行ったところに、いい感じの川があるってジークから聞いたから、そこでバーベキューとかどうかなって思ってるんだ」

「いや、だから、それはやめようって言っただろ。リサの体に何かあったら大変だ」

リサの言葉にすかさずジークが反論する。

実はこのバーベキューのことは初夏くらいから考え始めており、アシュリー商会主催の料理コンテストが終わったなら、すぐにやるつもりでいた。その時はリサの妊娠が発覚していなかったため、ジークも乗り気だったのだ。

しかし、先日リサの妊娠がわかった途端、ジークは意見を翻した。

リサとしてはお腹が大きくないうちに、という気持ちもあるので、川辺でのバーベキューを決行したいのだが、ジークはまったく聞く耳を持ってくれない。

「あら、ジークくんってこんなに過保護だったの？」

デリアが驚いたような顔で言った。

「そうなの。こないだまでは普通に仕事してたんだから、大丈夫だって言ってるのに……」

リサが困った表情で嘆くと、オリヴィアはクスリと笑う。

「私の旦那もそうだったわ。男性は実感がない分、過剰に心配しちゃうのかしら。その気持ちも

わからなくはないんだけどね……。ジークくん、妊娠期間は長いんだから、今からそんな調子ではダメよ。それに適度に運動しておかないと、いざ出産する時に耐えられないわよ」

「……そうかもしれないが……」

出産経験のあるデリアとオリヴィアから言われて、ジークも少し思うところがあるのだろう。そう言っただきり口をつぐんでしまった。

「それにバーベキューっていうのがどんなものかわからないけど、川辺ってことは、野外でお料理したりするんでしょう？」

「そうなの！ バーベキューっていうのは、野外で火をおこして料理をすることなんだ。普段はできない大がかりな料理なんかもできるし、何よりみんなで火を囲んで食べるのは楽しいしね」

オリヴィアの問いに、リサは目をキラキラさせて答えた。

バーベキューの醍醐味は、開放感のある野外で、みんなでわいわい食べることである。

大人数でできるので、交流会には持ってこいだ。

「それならリサさんだけが料理に追われることもないだろうし、いいんじゃないかしら？ それこそお腹が大きくなったらできないし、赤ちゃんが生まれたら、ある程度大きくなるまで、そんな機会もなくなっちゃうでしょ？」

オリヴィアに続いてデリアも賛同した。

ジークは口元を拳を当てて考え込む。

ややあって顔を上げると、「そうだな」と頷いた。

「二号店のメンバーも一緒なわけだし、そうなれば料理する人間も増えるからな。リサだけが無理することもないだろう」

ジークが考えを改めてくれたので、リサはホッとする。アシストしてくれたオリヴィアとデリアに視線を送ると、二人から微笑みが返ってきた。

身近に出産経験者がいるのはとても頼もしい。今後、ジークの過保護っぷりに困ることがあれば、また二人に頼ろうとリサは思った。

「あ、そろそろ開店の時間じゃないですか？」

話がまとまったところでヘクターが声を上げる。

「そうだね。それじゃあ、今日も一日頑張らましよう」

リサは気持ちを切り替えるようにパチンと手を叩いた。

こうして今日もカフェ・おむすびは、いつも通り開店するのだった。

第二章 お誘いしました。

夏も終盤だというのに、相変わらず暑い一日だった。

まだ長い昼がようやく終わり、閉店の時間が刻一刻と近づいていく。

そんな中、入口のドアが開き、新たな客がやってきた。

「いらつしゃいませ」

カウンターの途中で作業をしていたリサは、ドアベルの音に反射的に顔を上げ、入口の方に目を向ける。

すると、そこに見知った顔が二つ並んでいた。

「二人一緒に来るのは珍しいね。仕事の帰り？」

リサがフレンドリーに話しかけたのは、燃えるような赤い髪をした小柄な男性——ラインハルトと、紫の髪をしたスレンダーな女性——ヴィルナである。

ラインハルトとヴィルナは、フェリフォミア騎士団に所属している。リサの夫であるジークも、かつて騎士団に所属しており、この二人とは学生時代からの同期だ。

「ちょうど帰りが一緒になってな」

そう言っただけでラインハルトがカウンター席に座ると、ヴィルナもその横に座った。

「こんにちは、リサさん。もう何度も来られないからね。せっかくだからついてきたんだ」

「そっかあ、もうすぐヴィルナさんは国に帰っちゃうんだもんね」

ヴィルナはフェリフォミアの出身ではなく、お隣のニーゲンシュトゥックという国の生まれだ。長年婚約していた相手と結婚するため、この秋、国に帰ることになっていた。

「カフェにも来られなくなるし、みんなと会えなくなるのが寂しいよ」

「私も寂しいな。生まれてくる子供にも会ってほしかったのに」

「会いたかったなあ。とうか会いに来るね！」

「うん！ 待ってるよ」

ヴィルナとそんな会話をしつつ、リサは二人にお冷を出してメニユーを渡す。

まだ残っているケーキの種類を伝えてみると、厨房からジークが出てきた。

「二人とも来てたのか」

「ジーク、お疲れー」

カウンター席の二人に気づいたジークが声をかけると、ラインハルトが軽く手を上げる。

「あ、そういえば、来週のカフェの休業日って、お前ら暇か？」

ジークがラインハルトとヴィルナに尋ねた。

それを横で聞きながら、その日はバーベキューをやる日じゃなかったっけ？ とリサは思う。

「来週の休業日？ 俺は休みだけだ」

「騎士団の退団日がその二日前だから、私も空いてるよ」

ラインハルトとヴィルナがそう答えると、ジークは「よし」と頷いた。

「リサ、この二人もバーベキューに誘っていいか？」

「それはいいね！ ヴィルナさんのお別れ会も兼ねてやろう」

「ああ。それと火おこし要員の確保だ」

「え、話が見えねえんだけど」

ラインハルトがジークの言葉に訝しげな表情を浮かべる。

「あのね、来週カフェのメンバー全員で、秋から新しく入る子の歓迎会っていうか、親睦会をしようと思ってるんだ。王都の外にある川辺でバーベキュー……っていうのは野外で料理を作って食べることなんだけど、二人も一緒にどうかかって」

「何それ楽しそう！ 行く行く！」

リサの説明に興味が湧いたのか、ヴィルナはすぐに食いついた。

「あー、それで火おこし要員ってことか。俺もいいぞ」

ラインハルトが納得した様子で頷く。

「よかった〜！」

「でもカフェ・おむすびの親睦会なんだろう？ 部外者の俺らが加わってもいいのか？」

せつかくの親睦会を邪魔してはいけないと、ラインハルトが気を遣って聞いてくる。

竹を割ったような性格のラインハルトだが、こういうところに気が回る男なのだ。この若さで分隊長を務めているのも頷ける。

ラインハルトの質問にジークが答えた。

「オリヴィアとデリアは家族で参加するらしいし、従業員でなくてもかまわない。それに、お前ら

には何かと世話になってるからな」

「そうそう。遠慮なく参加して」

リサもジークの言葉に同意する。

「まあ、その分こき使わせてもらうが」

「おい！ ……まあ、別にいいけどな」

ジークに突っ込んだラインハルトだったが、その後ちらりとリサを見る。その目はリサの顔とうよりもお腹のあたりを彷徨さまよっていた。

ラインハルトも妊娠しているリサのことを気遣ってくれているらしい。

それがくすぐったくもあり、少し大げさだと思ふ部分もあり、リサは苦笑してしまう。

「それで、お二人とも注文はお決まりですか？」

話題を切り替えるべく、メニューを持ったままのラインハルトとヴィルナに問いかけた。

「私はホットサンドとアイステイー、それと食後にリユーミのシャーベットで！」

「俺はピザトーストと、食後にアイスコーヒーとプリンにする」

仕事終わりだからお腹が減っているのだろう。二人は軽食に加えてデザートと飲み物をそれぞれオーダーしてくる。

ちなみにリユーミというのは、メロンに似た果物だ。

「かしこまりました」

リサは伝票に注文を書きつけると、それをジークに手渡す。

最初から自分が用意するつもりでいたらしい彼は、すんなり受け取って厨房ちゆうぼうへと向かった。

カフェの営業が終わり、リサはジークと共に帰宅した。

軽く夕食をとったあと、寝る支度を始める。

リサは自室で着替えながら、それを手伝ってくれている専属メイドのメリルに「そういえば」と話を切り出した。

「来週のカフェの休業日にね、カフェのメンバーと他の何人かで、王都の外の川辺でバーベキューをする予定なんだ」

リサの脱いだ服をたたんでいたメリルは、小さく首を傾げる。

「バーベキュー、とはなんでしょうか？」

「バーベキューっていうのはね、野外で火をおこして、お肉や野菜を豪快に焼くことなの」

「野営の時の煮炊きのようなものですか？」

「そうそう。子供のいるメンバーもいるし、まだ暑いから川で涼みながら、みんなでわいわいしようと思つて。カフェ・おむすびの歓迎会と親睦会しんぼくかい、ニーゲンシュトゥックに帰るヴィルナさんの送別会も兼ねてね」

「なるほど。では、私も同行いたします」



「……ええっ?」

リサが驚いてメリルの方を見ると、彼女は決意に満ちた顔をしていた。

「野外ということですし、リサ様に何かあっては大変ですから」

「でも、メリルにはいつも家のことを任せちゃってるし、たまには休んだ方がいいんじゃない?」

「いえ、むしろ心配で休まりません! 従業員の皆様にのんびりしていただくためにも、人手は多い方がいいのではないのでしょうか」

「それはそうだけど……」

「ジーク様にも了解をいただきます。それならばいいでしょうか?」

「むしろジークは『よろしく』って言いそう……」

最近のジークの言動からして、歓迎こそすれ断ることはないだろう。

お休みの日までメリルに面倒をもらうのは、なんだか気が引けるが、メリルも一緒に楽しんでくれればいいかも? とリサは思う。

「わかった。おいしいもの作るから、メリルもパーベキューを楽しんでほしいな」

「ええ、それはもう!! ……じゃなくて、私はリサ様に何かあったらと……」

『おいしいもの』という言葉に、一瞬だけ目を輝かせたメリルだったが、ハツとして取り繕うように言った。

しかし、ごまかすには遅く、リサはクスリと笑う。

リサがジークと結婚して、クロード家の本館から別館に居を移した時、メリルはリサの専属メイドになった。

まだ若いメリルはその役を任されたことで、初めはかなり気を張っていた。しかし、実は結構な食いしん坊だったらしく、リサとジークが作る料理やお菓子を見るたびに目を輝かせている。

本人は、すぐにキリツとした顔で取り繕つくろおうとするのだが、料理を見た瞬間、顔がぱあっと明るくなるのでバレバレだった。

最近では別館での仕事にも慣れ、肩の力が抜けてきたのか、以前より素すを見せてくれるようになっていた。それが可愛くて時々からかうのがリサの中で小さなブームとなっていた。

リサに笑われ、決まりが悪くなったのか、メリルはわざとらしく咳払いをしてから「ですのど！」と強い口調で言う。

「その日は私もお供いたしますからね。ジーク様にもそうお伝えいたします」

「うん、わかったよ」

リサは微笑うなずんで頷うなずいた。

そうして話しながらも着替えが終わる。朝晩は徐々に涼しくなってきたが、それでもまだまだ暑い。

とはいえ、妊婦なので体を冷やすわけにはいかないリサは、しつかりとパジャマを着ていた。

以前はネグリジェを着ることが多かったが、今は裾すその長いチュニツクの下にキュロットのような

ものを穿はいている。

これはリサの養母で、服飾ブランド『シシルメリー』のデザイナー兼オーナーをしているアナスタシアが、リサのために用意してくれたものだ。

お腹を締めつけない、ゆったりした作りになっている。

「では、お休みなさいませ」

「お休みなさい、メリル」

メリルに就寝しゅうしんの挨拶あいさつをしたリサは、自室と繋がっている寝室へ向かう。

中央に置かれた大きなベッドにはすでにジークがいて、枕を背もたれのようにして座り、本を読んでいた。

「何読んでるの？」

リサがベッドに入りながら聞くと、ジークは「ああ」と言っただけで本の背表紙を見せてくれる。

「名前の由来とその歴史……」

リサはタイトルを口にする。なんと、それは名付けの本だった。

「え、もう赤ちゃんの名前考えてるの……？ 早すぎない!?」

「いや、俺もまだ早いと思ったんだが、ギルさんから『読んでおいた方がいい』って押しつけられて……」

「ギルさん……」

ギルフォードはリサの養父である。フェリフォミア王宮で魔術師省の長官を務め、侯爵の位を持つすごい人のだが、リサの妊娠に誰よりも舞い上がっていた。

その妻であるアナスタシアもたいそう喜んでいて、リサのパジャマだけでなく、生まれてくる赤ちゃんの服を早くもデザインするなど、とても精神的に動いてくれている。

ちよつと張り切りすぎかなと思わなくもないが、アナスタシアが作ってくれるのは実用的なものばかりなので、リサはありがたく受け止めていた。

一方、ギルフォードはアナスタシアに比べてできることがあまりないため、少し歯がゆい気持ちでいるらしい。

別館の一室を子供部屋に改装してくれているので、それだけでもありがたいのだが、本人はもっと役に立ちたいのだろう。

その結果として、ジークがこの名付けの本を押しつけられたようだ。

「性別もわからないし、生まれるのはまだまだ先だよ……？」

「そうなんだが、身近な人の名前の由来なんかを調べるのはなかなか面白いぞ。親たちはいろんな願いを込めて名前を付けるんだって、しみじみ思われる」

ジークはそう言って本を閉じ、ベッドサイドのテーブルに置く。枕を元の場所に戻してリサの横に寝転がると、彼女の下腹部にそつと手を当てた。

まだ膨らみも何もないその場所。

しかし、そこには新しい命がたしかに息づいている。

妊娠がわかってからというもの、ジークは寝る前にこうしてリサのお腹に手を当てるのが日課となっていた。

それは実際に身ごもっているリサとは違う形で、父親になるという自覚を促す儀式なのかもしれない。

いつもと変わらない無表情なのだが、この上なく真剣にリサのお腹を見つめているのがわかり、リサも黙ってジークの手のぬくもりを感じていた。

やがて気が済んだのか、ジークは手を離して「寝るか」と声をかけてくる。それに頷くと、リサはジークがかけてくれた薄いブランケットに包まれた。

第三章 バーベキュー日和です！

いよいよ迎えたバーベキューの日は、雲一つない快晴だった。

クロード家の前には二台の馬車が停まっている。

リサたちは朝から馬車に道具や食材を積み込み、それが終わると自分たちも乗り込んだ。

一台は二十人も乗れる大きな馬車で、馬四頭で牽引する。もう一台はジークの愛馬シャロンが牽

く荷馬車で、こちらに道具や食材を載せていた。

クロード家から二台連れ立って出発した馬車は、まずカフェ二号店を目指す。リサとジーク、メリル以外のメンバーとは、そこで待ち合わせしているのだ。

本店でない理由は、二号店の方が道幅が広いからである。パーベキューに参加する人数が多くなり、それに伴い大きな馬車を留意した。道幅の狭い本店の方に停めれば、通行人の邪魔になってしまうだろう。

まだリサとメリルの二人しか乗っていない、大きな馬車に揺られることしばし。ジークの荷馬車と共に、カフェ二号店の前に到着する。

店の前には、すでにメンバーが集まっていた。

「みんなおはよう！ さあ乗って！」

リサが馬車の乗降口から声をかける。

「おはようございます、リサさん！」

まず最初に駆け寄ってきたのは、オレンジ色の髪をショートカットにした女性だ。彼女はヘレナ・チェスター。かつてはカフェ・おむすびの本店で働いていたが、現在は二号店の副店長をしている。

「リサさん！ こっちで用意した食材はどうすればいいですか？」

ヘレナの後ろから顔を出したのは、鶯色の天然パーマの男性——アラン・トレイルだった。

彼もヘレナと同様、本店で働いていたメンバーで、今は二号店の店長を務めている。

「荷物は後ろにいるジークの馬車に積んで」

「はい！」

元氣よく返事をするアラン。彼に続いて荷物を運んでいくのも、二号店のメンバーだ。

きっちり編み込んだ赤毛を一つにまとめた若い女性はテレーゼ、くすんだ金髪のスマートな中年男性はマーヴインという。

そこへ、学院の料理科で講師をしている二人もやってきた。

「おはようさん、リサ嬢」

「おはようございます、リサ先生」

先に声をかけてきたのは、茶色いくせ毛を一つに括った男性——キース・デリンジエイル。料理科では主に調理技術を担当している。

もう一人は、ロマンズグレーが素敵な老年の男性だ。彼はセビリヤ・コロン。料理科では、主に動植物学を教えている。

料理科の創設時から、リサとジークと共に働いてくれている二人も、今回のパーベキューに招待されていた。

セビリヤは動植物学者で、かつてはよくフィールドワークをしていたというから、川辺の散策ではいいガイド役になりそうだ。キースには調理要員としても期待している。

せつかくの夏休みなのに、働かせてしまつて申し訳なくはあるけれど、日頃なかなかできないイベントを楽しんでくれたらとリサは思う。

そして――

「リサ先生……じゃなかつたりサさん！ 今日ほよろしくお願いします！」

嬉しそうな顔で元氣よく挨拶したのは、水色の髪の青年――ルトヴィアス・アシユリー・マティアスだ。出会つた頃は幼さの残る少年だつた彼も、今やすっかり身長が伸び、体つきも顔立ちも青年らしくなつた。

その上、この秋からカフェ・おむすびで一緒に働いてくれるというのだから、リサには感慨深いものがある。

そんなルトヴィアスとリサの間では、小さな者たちが挨拶を交わしていた。

「やつほー、シャーノア」

「なんだか久しぶりな気がするね、バジル」

リサの精霊バジルが気さくに声をかけたのは、ルトヴィアスの精霊であるシャーノアだ。

シャーノアは水を司る精霊で、薄紫のウェーブした髪に、青い瞳が特徴。ルトヴィアスの髪と同じ水色の服を着ている。

精霊には性別はないが、バジルが女の子っぽいのに対して、シャーノアは男の子っぽい見た目をしている。

バジルとシャーノアは友達同士と呼べる間柄で、バジルはよくリサのもとを離れ、シャーノアのところへ遊びに行つているようだ。

可愛らしい精霊たちの交流を横目に、リサはルトヴィアスを手招きする。

「ルトくんも乗つて乗つて」

リサとメリルしかおらず、がらんとしていた馬車が、あつという間に人で埋まつていく。

メンバーが次々と乗り込んでくるのを見守っていると、二号店の方からヴィルナの憤慨したような声が聞こえてきた。

「もー！ なんて来たのよ！」

「いいじゃないか。僕もバーベキューとかいう料理を食べてみたい」

怒るヴィルナに平然と言いつ返す男性の声。その声にリサは聞き覚えがあつた。

「え、リクハルドさん!? どうしてフェリフォミアに!？」

まるで真珠のような色合いの髪に、美しいと表現せざるを得ない整つた顔をした彼は、リクハルド・オーグレーション。

リサが名前を呼ぶと、赤い蠱惑的な目がこちらを向く。

にこりと笑つた彼は、「やあ、リサさん」と片手を上げた。

「ヴィルナを迎えに来ただけだね、何やら楽しそうな催しをするつて聞いて……僕も参加しているかな？」

「ちよつとリクハルド!!」

リクハルドはヴィルナの婚約者だ。ヴィルナが騎士団を辞めて帰国するのも、彼と結婚するからである。

だがヴィルナから聞いていた帰国日は、まだ先だったはず。それを考えると、かなり早いお迎えだが、一緒に夏の思い出を作りたいのだからとリサは思い至る。

「もちろんですよ！ 大人数の方が楽しいですから！」

「もー！ ごめんなさいね、リサさん」

快諾するリサに、ヴィルナは申し訳なきように謝ってくる。そんな彼女だが、どこことなく嬉しうにも見えた。

「食材はかなり多めに持ってきたから大丈夫！ ほら乗って」

リクハルドは自国ニーゲンシュトゥックのお酒を持ってきたという。それをジークの荷馬車に載せてから、ヴィルナと揃ってリサたちの馬車に乗り込んだ。

先日ヴィルナと共にカフェを訪れたラインハルトもいる。彼はジークが運転する荷馬車の方に乗るらしい。

二号店のメンバーとヴィルナたちが乗り終えたところで、本店のメンバーも乗ってくる。

オリヴィアとデリアの二人は子供連れだ。

「ヴェルノくん、ロレーナちゃん、おはよう」

「おはようございますー」

オリヴィアの息子ヴェルノと、デリアの娘ロレーナが声を揃えてリサに挨拶してくれる。

今年九歳になる二人は、救護院という保育園のような施設に通っている仲よしだ。

デリアの旦那さんも来るかと思つたが、残念ながらお仕事のため不参加だという。

接客担当の女性とその子供たちにつき、調理担当のヘクターが乗ってくる。

彼はリサの隣に座るメリルを見ると、驚いたようにぎよつとしつつ、どこか落ち着かない様子で空いている席に座つた。メリルとはひょんなことから知り合いになり、以来、少し意識しているようだ。

「みんな揃つたね！ じゃあ出発しますよー！」

リサが確認のために声をかけると、ヴェルノとロレーナが「おー！」と応えてくれる。

微笑ましいやりとりに、みんなが自然と笑顔になりつつ、馬車はゆつくりと動き出した。

川は馬車が通れる道から少し離れたところにある。できるだけ近くに停車すると、みんなで手分けして道具や食材を運ぶ。

リサも荷物を運ぼうとしたのだが、ジークとメリルに止められる。ヴェルノやロレーナのような子供さえ手伝つてくれているのに、大人の自分が何もしないのはちよつと……と主張すると、渋々といった感じで軽い敷物類を持たされた。

敷物を敷かないと荷物が置けないため、リサは付き添いのメリルト、かまじ竈を設置する係のラインハルトと共に、先頭に立って川辺へ向かう。木立を抜けると、景色がぱっと開けた。

「わぁ！ 川だ!!」

「そりゃあな」

当たり前のことを言うリサに、ラインハルトが笑いながら突っ込む。

「そうだけど、見た瞬間、川に来たーって感じがしたから!」

フェリフオミアの王都にいと、こういった自然の風景を見ることはあまりない。

王都内にも小さな川はあるが、かがん河岸は石畳でしっかり整備されている。

「わ！ 川だ!!」

「ふわぁ！ 川ー!!」

少し後ろを歩いていたヴェルノとロレーナが、同時に華やいだ声を上げた。

子供たちの反応がリサと同じだったからだろう。ラインハルトが「ぶっ」と噴き出し、体を震わせている。

リサは悔し紛れに「私の心はまだ純粹なんですー」と返した。

「ほら、分隊長さん。笑ってないでかまじ竈の場所を決めてよ」

「……くくつ、そうだな。あの辺が平らで広そうだから、そこにしようぜ」

笑いをかみ殺しながら、ラインハルトはかまじ竈用のレンガを持って移動する。

川から十メートルほど離れたそこは、砂利じりまじりの地面だが、ラインハルトの言った通り平らで、敷物を敷くにはよさそうな場所だった。

さっそくリサが敷物を広げると、メリルが慌てて止める。

「リサ様！ 私がやりますから」

「じゃあ、メリルはそっち持つてくれる？」

「いえ、そうではなく!」

「一人じゃ大変だから、二人でやった方がいいでしょ？」

過保護なメリルをいなし、リサは彼女と二人で敷物を敷く。六畳ほどの大きさのものを二枚敷くと、ヴェルノとロレーナがそれぞれ運んできたクッションを置いてくれた。敷物を敷いているとはいえ、そのまま座るのはお尻が痛いだろうと思って、クロード家から持ってきたのだ。

最後にメリルが運んできたバラソルを立てると、とても快適そうな場所ができた。

他のメンバーも続々とやってくる。

重い物は男性陣が運んできてくれたのだが、その中にはヴィルナも交じっていた。彼女は自分より軽そうな物を運んでいるリクハルドをからかうように言う。

「まったく、ひ弱だなあ」

「うるさい、僕はどちらかといえば頭脳派なんだ」

ヴィルナの言葉にリクハルトはムツとする。頭脳派と言いつつも、食材が入ったダッチオーブンを立派に抱えていた。

だがヴィルナの方は、それより重い鉄板を軽々と運んでいる。もう退団したとはいえ、さすが騎士団にいただけある。

それらの荷物は敷物の上に置いてもらったり、ラインハルトが設置し始めた竈かまどの方へ運んでもらったりする。

その指示を出すのはリサだ。

ジークやメルルからあまり動かないように言われているのもあるが、どこに何が必要かを把握しているのはリサなので、自然とその役になった。

何人かが馬車と川辺を往復し、ようやく荷物が運び終わる。

大型馬車の御者まじにシャロンを預けたジークも、こちらにやってきた。

「お疲れ様。荷物、運んでくれてありがとうね」

「いや、そっちの方が疲れただろう。俺は馬車を走らせただけだから。準備はどうだ？」

「ラインハルトくんが中心になって竈かまどを作ってくれてるよ」

リサが指さす方にはラインハルトがいて、持ってきたレンガを使い、しっかりとした竈かまどを作ってくれていた。

その横にいるアランが、持ってきた鉄板や網かまどの大きさを合わせている。

「リサ嬢、このあとはどうするんだ？」

キースがそばにやってきて、これからの予定を聞く。

「とりあえず、お昼までは各自好きに過ごしてもらおうと思う。料理を作る係の人たちには、ゆっくり準備してもらいながらね」

お昼まではまだかなり時間があるので、それぞれ川で遊ぶなり、のんびりするなりしてもらおう。その間にリサを中心とした調理担当のメンバーが、少しずつ準備を進めていく。

「了解。俺も様子見て調理に参加するわー」

「助かるよ。といつても仕事じゃないから、ゆっくり楽しくやろう」

キースの申し出が嬉しくて、リサは自然と微笑む。

今日はルトヴィアスの歓迎会とヴィルナの送別会だが、仕事ではない。あくまでプライベートだ。みんなで自由に楽しくおいしい料理を食べられればそれでもいいと思っていた。

「お母さん、川で遊んできていい？」

ヴェルノとロレーナが、敷物に座るオリヴィアとテリアのもとへやってくる。

「いいけど、気をつけるのよ」

「はーん」

二人は靴を脱ぐと、川辺に駆けていった。

パシャッと水しぶきを上げる音と共に、「冷たい！」「キャア！」という楽しそうな声が聞こえて

くる。

一方、アランは何やら自分の荷物をこそごとと漁^{まき}っていた。

それを見たルトヴィアスが彼に声をかける。

「アランさん、何持ってきたんですか？」

「釣り竿^{ざお}だよ。俺の地元^{ごきよ}の町、この川の上流にあつてさ、子供の頃はよく釣りをしたんだ」

「へえ〜」

どうやらアランは自前の釣り竿^{ざお}を持参^{もく}したらしい。

「ルトくん、釣りしない？」

「え、俺は……」

アランは二本持ってきた釣り竿^{ざお}のうち的一本をルトヴィアスに差し出す。ルトヴィアスは戸惑った様子で、助けを求めるようにリサを見た。

しかし、そんな彼にアランは笑顔で迫る。

「初めてなら教えてあげるよ〜」

「でも——」

「せっかくだし勝負しよう」

アランが勝負と言った途端、ルトヴィアスの目の色が変わる。それを見てアランはにやりと口角を上げた。

「初めてみたいだから、ハンデつけたげる」

「……ピギナーズラックという言葉を知りませんか？」

ルトヴィアスはアランの言葉に煽^{あお}られ、やる気になったようだ。釣り竿^{ざお}を受け取って川の方へ歩いていく。

長らくカフェ・おむすびの常連だったルトヴィアスは、アランとももちろん顔見知りだ。しかし、初めは少しギクシャクしていたのだ。

というより、ルトヴィアスがアランのことを敵視しているくらいがあった。

アランがカフェ・おむすびで働き出したのは、ちょうどルトヴィアスが料理人を目指し始めた時期で、リサやジークから料理を教えてもらいたいと切望^{せんぼう}していた頃だった。ゆえにアランに対して羨望^{せんぼう}と共に嫉妬^{しつと}心を抱いたようだ。アランもそれがわかっていて、わざとからかっていたような節^{ふし}がある。

ルトヴィアスが料理科に入り、精神的にも技術的にも成長したことで、アランに対する態度は軟化した。

しかし、わだかまりは完全にはなくならず、お互い料理人として尊重し合ってはいても、仲よくはなりきれない微妙な関係になっていたのだ。

そんなアランとルトヴィアスが釣り勝負とは、リサとしても結果が楽しみである。

「さて、私もその辺を散策してくるとするかね」

セビリヤが「よいしょ」と言って敷物から立ち上がる。

「お昼ご飯作って待ってますね」

「楽しみにしてるよ。ああ、野外を散策するのは何年ぶりかな」

そう言いながらセビリヤは嬉しそうに笑う。

動植物学の研究者だったセビリヤは、若い頃いろんな場所を巡り、動植物の観察をしていたと聞く。今は一線から退き、料理科で講師をしてきているが、その頃の血が騒ぐのかもしれない。

川からの涼しい風が吹く中、メンバーはそれぞれ好きなように時間を過ごし始める。

リサは背中中のクッションに寄りかかりながら、その様子を穏やかに見守った。

第四章 バーベキューは豪快にいきましょう！

バーベキューの醍醐味だいごみといえ、普段は作れない豪快な料理を作ることだ。たとえ普段と同じメニューだったとしても、家で作るものより不思議とおもしろく感じられる。

そんなわけで、今回のバーベキューでもリサはいろいろな料理を考えてきていた。

まず、一番時間がかかる料理から作り始める。

ダッチオーブンを使った煮込み料理だ。

「さて、ぼちぼち作りますかー」

リサが敷物から立ち上がると、ジークとメリルが咎めるような視線を送ってきた。

「リサは座っててくれ。俺がやるから」

「えー、でも料理したい……」

野外で豪快に料理をする機会なんてそうそうない。この機会を、リサはおそらくメンバーの誰よりも楽しみにしていたのだ。

「ジークってこんなに過保護だったのか……?」

リサとジークのやりとりを見て、ラインハルトが驚きと呆れの交じったような顔をする。

「心配なのはわかるけど、大丈夫だって」

リサは説得するように言うが、ジークは首を縦に振らない。

すると見かねたラインハルトが何かを準備し始めた。

荷物を入れてきた木箱をひっくり返し、竈かまどの周りにいくつか並べて置く。さらに敷物の上に置いていたクッションを持ってきて、その木箱の上に載せた。

「ほら、リサさんはこれに座ってもらえばいいだろ?」

「うわぁ、ラインハルトくんありがとう!」

リサは笑顔でお礼を言う。ラインハルトは木箱で簡易な椅子を作ってくれたのだ。

「俺は料理できないけど、火の番はやるから、おいしいもの作ってくれよ」

そう言って、彼はにかつと笑う。こういう気遣いもでき、男らしくて頼れるところがラインハルトのいいところだ。

こうなるとジークも反対できず、ぐうっと息を詰まらせる。

彼とてリサのことを束縛そくはくしたいわけではない。心配であるがゆえのことなのだ。本当はジークもラインハルトと同じように、リサのおいしい料理を期待している。

「……重い鍋を運んだりするのは俺がやるからな」

「うん、よろしく！」

ジークが折れたところで、いよいよ料理開始だ。

まずは煮込むのに時間がかかるものから仕込む。リサの指示でジークが取り出したのは、一羽丸ごとの鳥肉だ。

ラインハルトが火おこしの準備をしながら、「丸焼きか？」と尋ねる。

それを聞いたリサは思わずクスリと笑った。

たしかにこの形を見ると丸焼き——ローストチキンを想像するが、今日作るのは違う。

鳥肉の中には、クロード領原産のもち米に、刻んだ香草と唐辛子に似たペルテンという野菜を交ぜたものを詰める。中身がこぼれ出ないよう、端に木串を刺して止めていた。

それをダッチオーブンに入れ、ぶつ切りにした白いネギのような野菜——ニーオレをたっぷり入れる。鳥肉の周りに敷き詰めるような感じだ。

さらにセベルという、しょうがに似た根菜を千切りにして加え、塩を少し振りかける。

最後に、鳥肉が完全に浸ひたるくらいの水を入れ、竈かまどの上にセットした。

「沸騰あつちするまで中火で、そのあとは弱火ね」

「了解！」

ラインハルトは任せろと言わんばかりに応え、竈かまどに組んだ薪まきに、着火用の魔術具で火をつけた。

こちらの世界には木炭がないので、今回のバーベキューは薪まきで行おこなう。野営で薪まきを使い慣れているラインハルトの存在は、かなりありがたかった。

あつという間に着火し、火が大きくなる。火はダッチオーブンの底にしっかり届き、中身が加熱され始めた。

丸ごとの鳥肉を使ったこの料理は参鶏湯サムゲタシ。韓国のスープ料理だ。

じっくり煮込むと鳥のエキスがスープに溶け出し、さらにお肉もほろほろになっておいしい。ダッチオーブンは保温効果に優れているので、時間がかかる煮込み料理にぴったりだ。

時季的に熱いスープはどうかと思ったが、一品くらいあってもいいかと考え、参鶏湯サムゲタシを作ることにしたのである。

火加減の調整をラインハルトに託し、リサは次の料理に移る。

バーベキューやキャンプといえば、やっぱりカレー。

今回はひき肉を使ったキーマカレーを作るつもりだ。

「次はカレーね」

「ああ」

リサがジークに指示を出すと、少し離れたところから「カレー!？」という声が聞こえてきた。声のした方を見ると、リクハルドと一緒に付近を散策していたヴィルナが、急いでこちらに向かってくる。

「リサさん、カレー作るの!？」

そばに来るなり、そわそわしながら確認してくるヴィルナ。

リサは笑顔で頷いた。

「うん。野菜とひき肉のキーマカレーだよ」

「やった!」

ヴィルナはよほど嬉しかったのか、両手をぐつと握る。

「カレーって、たしか総帥が好きな料理だったよね?」

リクハルドが思い出したように言った。総帥とは、ヴィルナの父ロディオンのことだ。彼らの母国ニージェンシュトックの騎士団で総帥を務めている。

ロディオンは以前、リサがフェリフォミア騎士団に野外料理の指導をした際、たまたま視察に来ていて、その時作ったカレーをいたく気に入っていたのだ。

ヴィルナから聞くところによると、ニージェンシュトックに戻ってからも、リサの作ったカレーを再現しようと、たびたび料理人に作らせているらしい。

「なんか暑い時ってカレーが食べたくなるよね! 暑い、辛い、でもおいしいって感じで!」

「ふふ、わかるわかる」

ヴィルナの抽象的な言葉に、リサは笑って頷く。

たしかに暑い中、汗をかきながら食べるカレーは無性においしい。

「カレー作るなら私も手伝うよ!」

「本当!? 助かる!」

ヴィルナの申し出をありがたく受けたリサだが、ヴィルナには料理ではなく、カレーに使う竈の火おこしをお願いする。

「任せて!」と請け負うヴィルナも端からそのつもりだったらしい。というのも、彼女は料理が苦手なのである。

参鶏湯を煮込んでいるのは別の竈で、ヴィルナが火をおこし始める。彼女も騎士団の野営で薪の扱いに慣れているのか、あつという間に火がついた。

その竈にジークが鍋をかける。

鍋が温まったところで油を引き、あらかじめみじん切りにしてきた野菜を投入。きつね色になるまでじっくり炒めるのがポイントだ。

焦げつかないよう木べらをしきりに動かしながら、ジークがヴィルナに「火が強い」「今度は弱い」と細かく注文をつけている。

それに文句を言いつつも、ヴィルナは火ばさみを巧みに使い、火加減を調整していた。

「やっぱり仲いいですね、あの二人」

隣にいたリクハルドがリサに話しかけてくる。

「そうですね。学院時代から一緒だったって言ってましたし」

「……ヴィルナはこのままフェリフォミアにいた方がいいのかも」

リクハルドが切なそうに呟く。すぐ近くにいるリサには聞こえたが、ジークと賑やかに言い合っているヴィルナの耳には届いていないだろう。

「うーん、それはどうでしょうか」

「どう、とは……？」

「ヴィルナさん、ニーゲンシュトゥックに『帰る』って言ってましたよ。当たり前かもしれないかもしれませんが、帰るっていうのは、そこが自分の居場所だって思ってるからじゃないですか？」

「ヴィルナが……」

リサの言葉に、リクハルドが嬉しそうに頬を緩ませた。

「もちろん私も、ヴィルナさんがニーゲンシュトゥックに帰っちゃうのは寂しいですよ。でも一生会えないわけじゃないし、手紙とかでもやりとりできますしね」

物理的には離れてしまうが、友達であることは変わりない。

それに国が違ったとしても、会う方法がないわけではないのだ。

——同じ世界にいるんだからね。

リサは元の世界に、もう会うことさえできない人たちがいる。それを思えば、近いうちに訪れるヴィルナとの別れは、そんなに辛くなかった。

「それに」

リサはセンチメンタルな気持ちを振り払うように明るく続ける。

「ヴィルナさん、帰る理由を聞かれた時、照れつつも嬉しそうにしましたから！」

ヴィルナがニーゲンシュトゥックに帰る理由は、リクハルドとの結婚だ。幼馴染で長い間婚約していたリクハルドと、ついに式を挙げるといふ。

フェリフォミアにいるのは、ヴィルナが二十歳になるまでという約束だったらしいのだが、なんやかんやと延びてしまっていた。フェリフォミア騎士団の水がヴィルナに合っていて、居心地がよかったようだ。

しかし、今年の夏。

リサとジークが新婚旅行でニーゲンシュトゥックに行った際、案内を買って出てくれたヴィルナとリクハルドが大喧嘩し、あわや婚約解消!? という状態までいってしまった。

だが、結果的に婚約は解消されず、むしろ二人の仲が深まることになったのだ。

また、新婚のリサとジークに触発しよくはつされてか、ヴィルナもリクハルドとの結婚をより現実のものとして意識したように思える。

だからこの一年は騎士団の仕事を徐々に引き継いだり、お世話になった人に会いに行ったりしていたと、リサはラインハルトから聞いていた。

その姿はニーゲンシュトゥックに帰り、リクハルドと結婚するのを待ち望んでいるように見えた。ヴィルナの気持ちは実にわかりやすかったが、ニーゲンシュトゥックにいたリクハルドにはわからなくて当然だ。

もしかしたら彼は、ヴィルナが嫌々いらいや帰ってくるのではないかと不安になっていたのかもしれない。「ヴィルナさんが、こんなに長くフェリフォミアにいられたのって、リクハルドさんの存在があったからなんじゃないですか？ 自分の帰りを絶対に待っていてくれるって、信じてたからだと思います」

リサが微笑みながら言うと、リクハルドもふわりと柔らかく笑った。

「ふふ、そうかも。僕もヴィルナが帰ってくることは疑いもしなかったからね」

小さい頃はずっと一緒だった二人。だからこそその信頼関係がある。

もちろん素直になれなかったり、喧嘩したりすることもあるけれど、心の奥底では固い絆きずなで結むすんでいた。

ふと視線を動かしたリクハルドにつられ、リサもそちらに目を向ける。

そこには火の調整をしながらも、ジークが作るキーマカレーに熱い視線を注ぐヴィルナの姿があった。

彼女が不意に顔を上げる。

「どうやらリサとリクハルドが自分を見ていることに気づいたらしい。」

「リクハルド、カレーもうすぐできるよ！」

ヴィルナは屈託くつたくのない笑顔で、片手に持った火ばさみを振る。

「いや、しばらく煮込むから食べられるのはまだ先だぞ」

「ええ!? そんなっ!!」

ジークの突っ込みに、絶望したような顔をするヴィルナ。

表情豊かな彼女の大きなリアクションに、リサとリクハルドは思わず顔を見合わせる。

そして、どちらからともなく肩を震わせ、笑いをはじかせた。

第五章 それぞれの川遊びです。

ルトヴィアスは釣り竿さおを手に、せせらぐ川をぼーっと見つめていた。

よくわからないうちにアランに乗せられ、彼と釣り勝負をすることになってしまった。ルールは